

Fons

生涯学習情報誌
-フォンズ-

80

No. 2016年10月11日発行

常陸太田市フォンズ・ネットワーク事務局

常陸太田市生涯学習センター内

〒313-0061茨城県常陸太田市中城町3280番地

TEL:0294(72)8888/FAX:0294(72)8880



常陸國北郡里程間數之記

高橋 靖浩

去る七月、加藤寛斎が記録した「常陸國北郡里程間數之記」が発行されました。フォンズネットワークリメンバーのうち、古文書を学ぶ有志が中心となつて読み進めていたものです。慣れない古文書の文字に悪戦苦闘しながらも、少しずつ内容が見えてくるにしたがつて、面白さがつのり、文字通り寝食を忘れそうになつた時間もありました。現在は加藤寛斎が生きた時代から約二百年の歳月が経つておりますが、「常陸國北郡里程間數之記」の世界を知ることによつて、さまざまな事柄が見えてきます。絵図の間に隙間なく記述されている「添え書き」から浮かび上がつてくるものは、当時の人々の日常生活、事件・事故、人々の絆、さらには今は失われた寺社等建造物。現在とほとんど変わらない道筋など胸に迫つてくるものがあります。加藤寛斎があるいた道を、彼と同じ目線でたどつてみてはいかがでしょうか。

写真 常陸國北郡里程間數之記より
西山御旧迹の図

フォンズとは…ラテン語で泉の意味です。とぎれることなく新鮮な情報をお届けできるようにと名付けられました。

「常陸國北郡里程間數之記」訪ね歩き

Part3

太田編

(天神林→藤田道) + 西光寺 (下利貞)

高橋 靖浩・原田 静雄・鴨志田 弘子

加藤寛斎著「常陸國北郡里程間數之記」をご紹介します。フォンズ62号では、金砂郷地区(白坂→大里道)同70号では太田地区(河合→瑞龍道)を取り上げました。今回は「常陸太田市指定文化財集中曝涼」(十月十五日→十六日)で公開される建物や仏像などが、同書ではどのようにとりあげられているのか、その一部をご紹介いたします。

11 西山御旧迹(西山莊)

A

梅里公

又常山公とも称シ給ふ、御諱光圀、

御字子龍

常陸國久慈郡太田の郷より

十町計もあなた、白坂と

いふ里の奥西山ニ隠居し

給ふハ元禄四年辛未

五月九日になん

ありける、(于時前権中納言六十四才)

夫より前に山間の木を伐、艸をかり、土を平らかにし

て松の柱、萱の軒端、竹に網る扉、仮初なる御構へ

なり、此御構の時朽たる

櫓を掘出したるを見

れハ、いつれのむかし

までハ此山のふもと迄も

久慈の海に入來り侍けん、今ハ

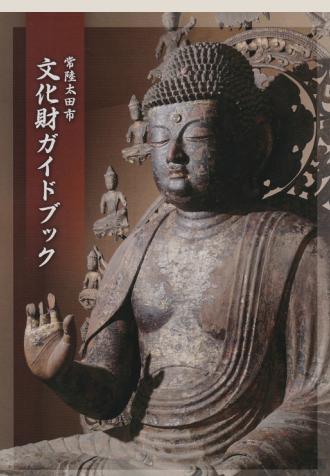
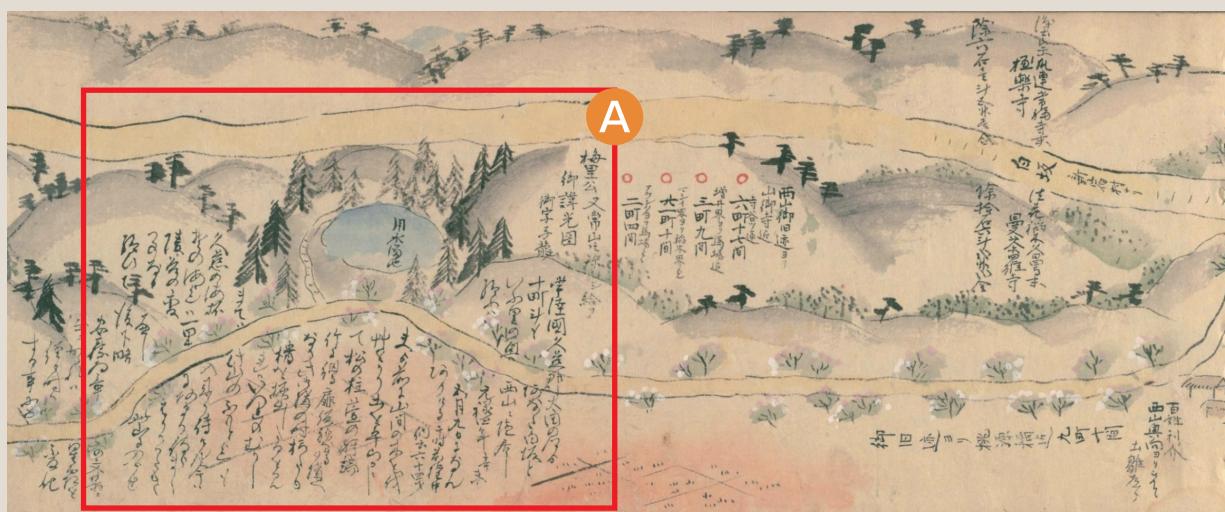
その海辺ハ里にあまり侍らまし、

陵谷の變はかりかたき

事なるべし、此山に入らせ

給ひて後、下略

安藤為章の文集三出ス、かれハ星霜を

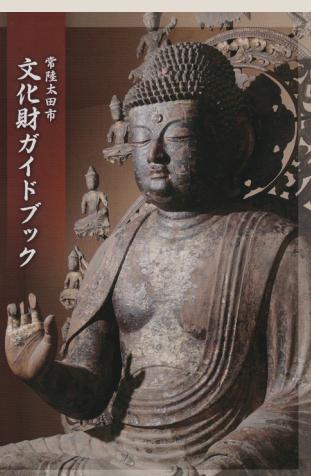


常陸太田市文化財ガイドブック

☆ガイドブックもご参照ください

古文書に書かれている文をどのように読み取るかについては諸説があります。はじめは読みにくいかもしれませんのが、古文書にふれる楽しみを皆様にもぜひ味わっていただきたく、今回は原文の翻刻を中心にご紹介いたしました。

七月二十一日発行のこの冊子は、八月初旬には完売となり、地元の皆さまの興味が大きなことに驚いています。冊子は市立図書館で閲覧できます。いま私たちが暮らす道とほぼ変わらない絵図を是非間近にご覧になつてください。

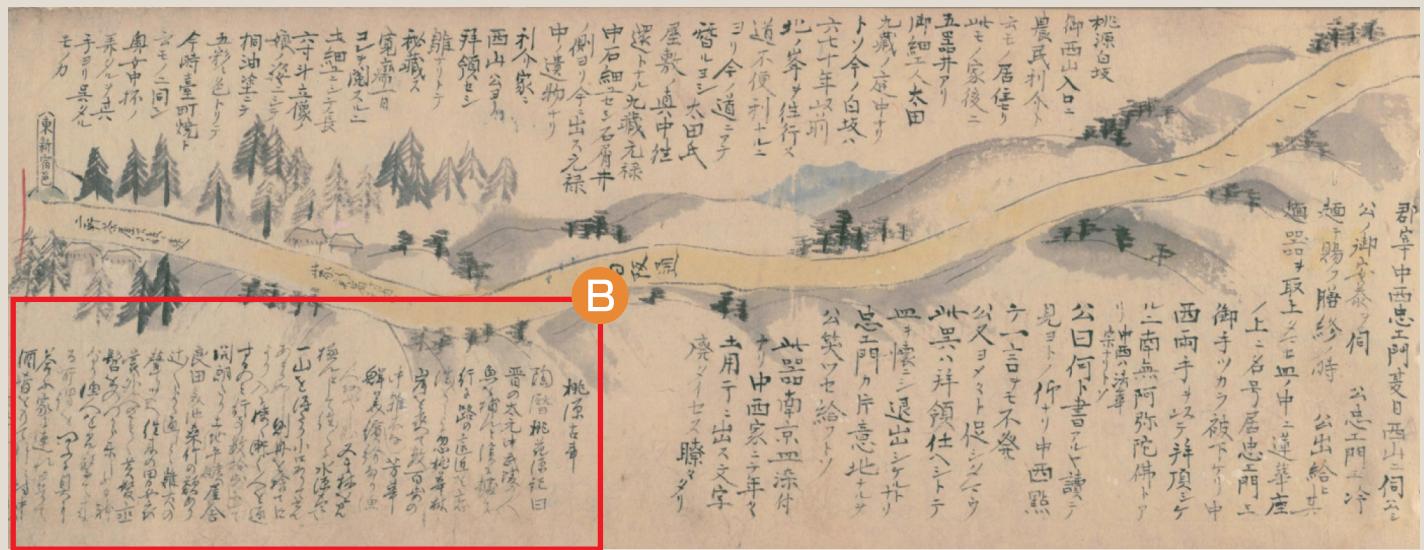


常陸太田市文化財ガイドブック

☆ガイドブックもご参照ください

古文書に書かれている文をどのように読み取るかについては諸説があります。はじめは読みにくいかもしれませんのが、古文書にふれる楽しみを皆様にもぜひ味わっていただきたく、今回は原文の翻刻を中心にご紹介いたしました。

七月二十一日発行のこの冊子は、八月初旬には完売となり、地元の皆さまの興味が大きなことに驚いています。冊子は市立図書館で閲覧できます。いま私たちが暮らす道とほぼ変わらない絵図を是非間近にご覧になつてください。

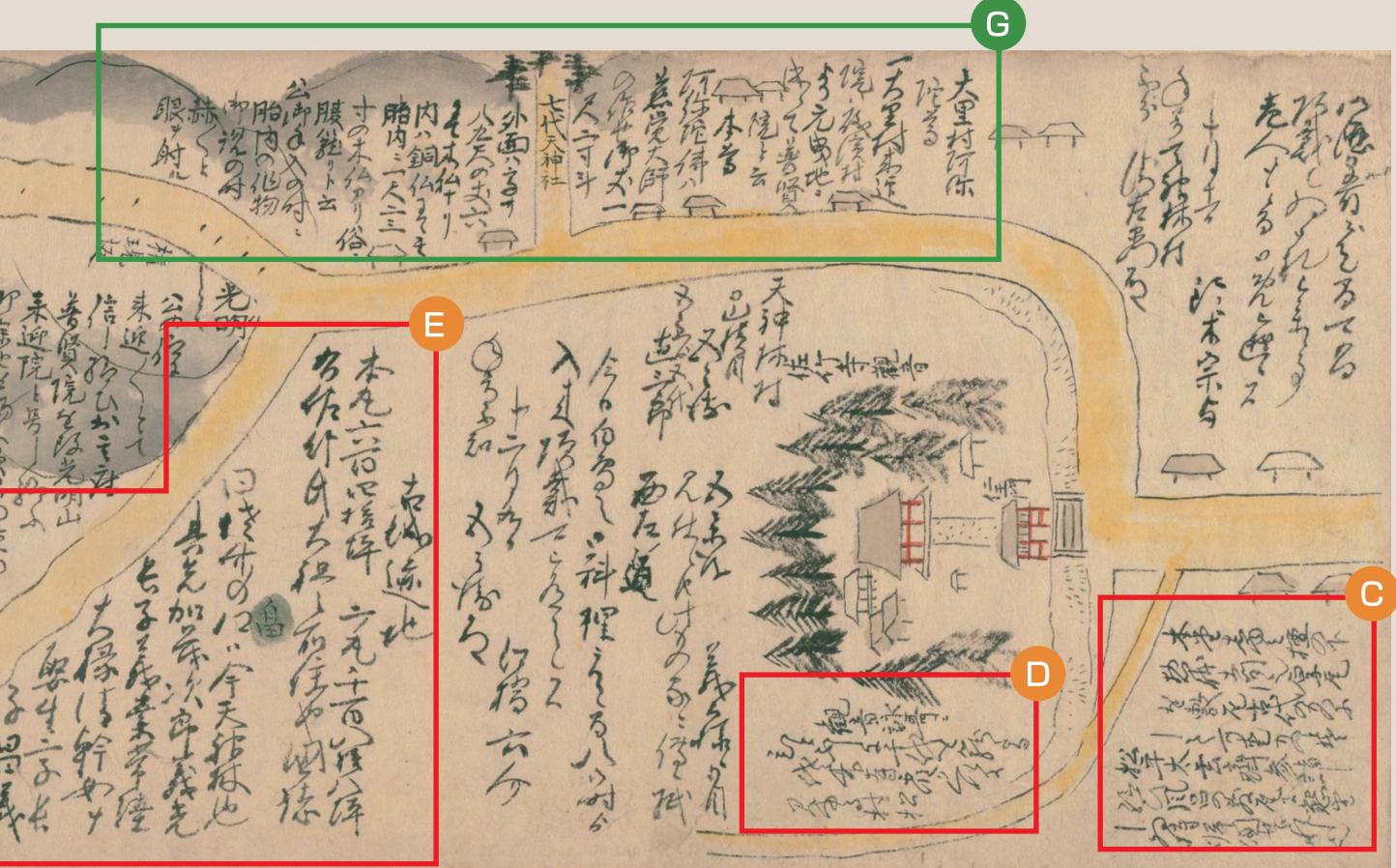


桃源古事
陶潛桃花源記曰、普の太元中武陵の人魚を捕んと溪に據て行に、路の遠近を忘れ往くしに、忽桃華林岸を挟みて数百歩の中雜木なし、芳華鮮美繽紛たり、漁人あやしむ、又其林を見極んとして往くに水源尽て一山を得たり、小口ありて光るあるが如し、則舟を捨て口より入に狭く漸く人を通するのみ、行事數拾步にして開朗たり、土地平曠屋舍良田美池桑竹の類あり、辻々よく通して雞犬の聲聞へ、往来の男女衣裳外人のことく黃髮垂髫をのつから楽しめる躰り、漁人を見驚て來る所謂を問ふ、具に答ふ、家に連れ帰りて酒肴をもてなし村中のもの來り集て問、この地の来歴を間に、先の世秦の乱を避、妻子邑人を率ひて此絶境に來り、復不出、終に外人と間隔すと、今ハ何の世ぞ、答て漢の有事をしらすと、魏晉に論なし、みなく歎息す、各其家に伴ひ酒食を出してもてなす、停る事数日にして辞し去る、既に元の舟を得て路により目印を誌して帰り、太守に至りて此旨を説告く、太守則人を遣したかい往しむ、先の誌所を尋るに、終に迷ひて又路を得と云々

新宿太田の地ニ桃樹を栽させ給ひシ、場所二大門より流出で増井新宿を経て太田の地にいたり用水となる、此川を源氏川といへり、此川を執り給ひ、西山を仙境と見立られ、源氏川を武陵の人漁せんと傳へ來りし幽渓の地と御工夫ありしと見たり、此源氏川なくむは桃樹を栽たり共詮なし、名君の御見立感に堪たり、因ニ云、御飭トコロ年々大門村より納ル也、是則源氏川の濫觴たるを以て吉例とし給ふとそ

B

佐竹寺



E 古城跡地
佐竹の郷ハ今天神林也、
其先加茂次郎義光
長子義業常陸大掾
清幹女ヲ娶生二子、
長子昌義舅たるに依て
為常陸国人又大明の頃
佐竹義俊三子成號三郎
為天神林氏云々

D 本堂しゆみ檀の下
惣躰土間也、厚瓦を敷、
瓦古代のものにして
可愛ものとそ、
松平太玄齋參詣し給ひ、
風呂の敷瓦に懇望し、
為持帰國せられし也

C 本堂しゆみ檀の下
惣躰土間也、厚瓦を敷、
瓦古代のものにして
可愛ものとそ、
松平太玄齋參詣し給ひ、
風呂の敷瓦に懇望し、
為持帰國せられし也



本堂（左）と樓門（右）

取り石



樓門の愛嬌のある仁王像

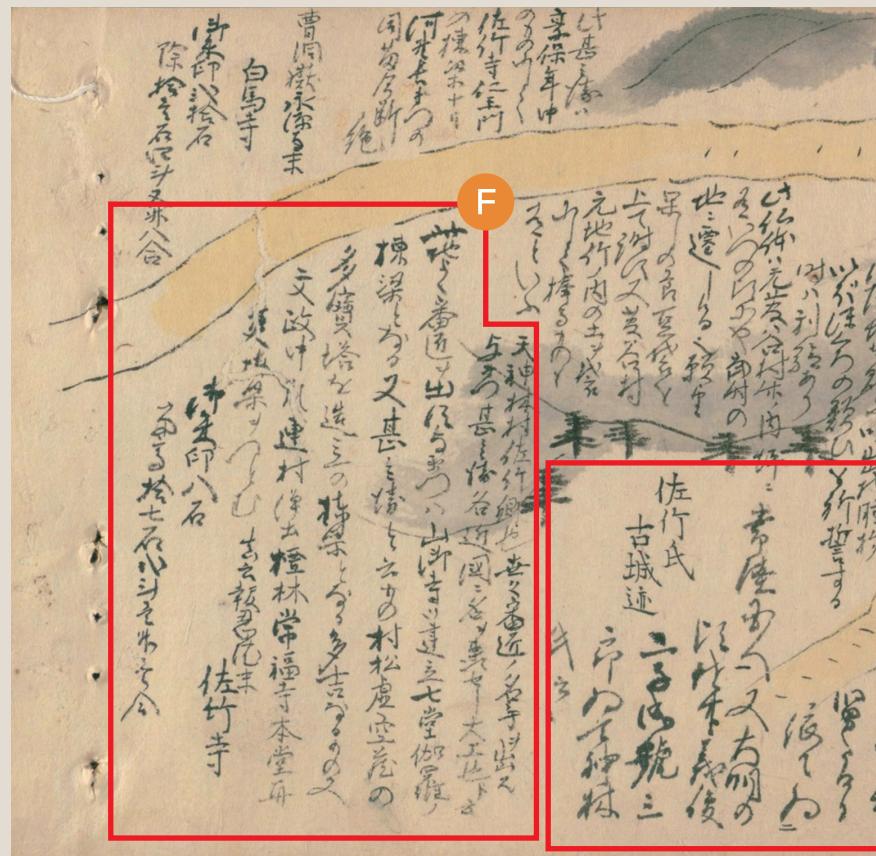
志の方たちのグループ「あおぞら大里会」

来迎院

絵図と同じように本堂と楼門がならぶ来迎院。添え書きの中にも「吹出物腫物いぼほくろの類ひを祈誓する時ハ利驗あり」と見え、今でもイボ取りのお寺として有名です。写真のような梵字が書いてあるイボ取り石がおいてあります。借りして持ち帰り毎日石でイボを擦りつづけるとボロッと取れる、とか。イボが取れたら石をお返しにお参りするそうです。地元有志の方たちのグループ「あおぞら大里会」が境内の手入れを定期的に行つており、秋の七草などが美しく植えられています。その昔ショウガの市が立つていたことから、その市の賑わいを感じていただこうと同会では集中曝涼の際ショウガの佃煮を作つて販売しています。

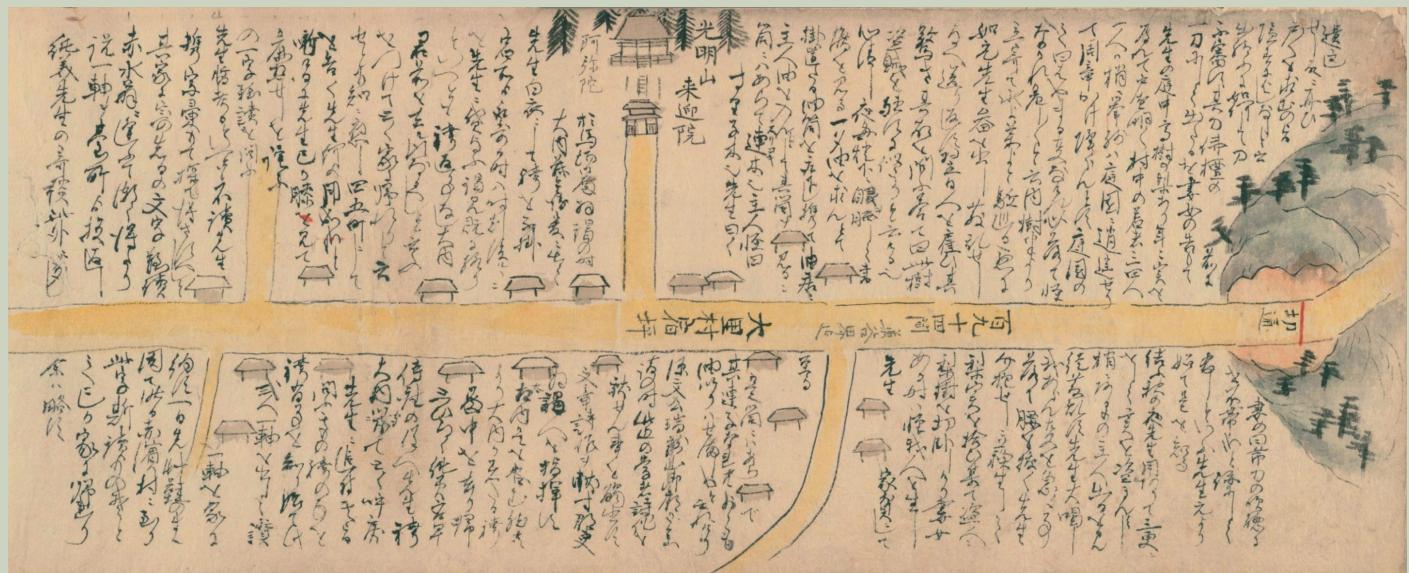
F

天神林佐竹郷也、世々番匠ノ名手ヲ
出ス、与衛門、甚兵衛各近國
二名ヲ轟せし大工也ト云、此地よく
番匠ヲ出ス、与衛門ハ山御寺御建立
云もの村松虚空藏の多宝塔を造立の
棟梁となる、多吉なるもの又文政中
此甚兵衛ハ享保年中のものにして、
佐竹寺仁王門の棟梁ナリ河野長衛門
の同苗今断絶



古文書を読むための1、2、3

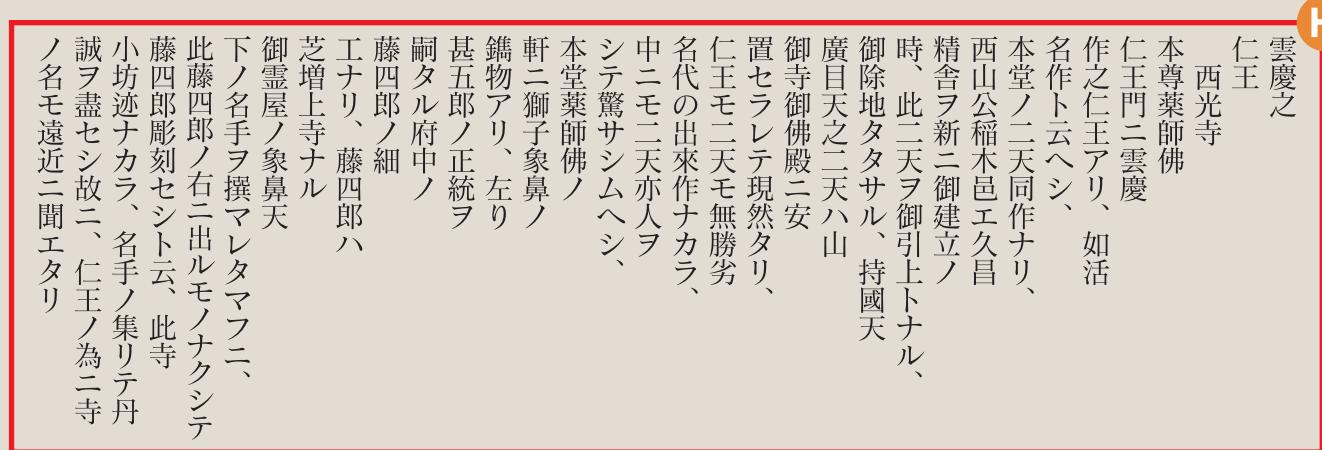
1. めげないで読んでみる。
2. 毎日少しづつみていると
突然見える瞬間がくる。
3. 読めるところから読んでみる。



G



大里村阿弥陀尊
一大里村來迎
院ハ磯濱村
より元曳地二
成候て普賢
院と云、
本尊
阿弥陀佛ハ
慈覺大師
の作也、御丈一
尺二寸計、
外面ハ高サ
八九尺の丈六
にて木仏ナリ、
内ハ銅仏にて、其
胎内二一尺二三
寸の木仏アリ、俗ニ
外籠リト云
公御手入の時ニ
胎内の作物
赫々として
眼ヲ射ル、公の仰に、
來迎院と号し給ふ、
信し給ひ於其座
普賢院を改光明山
來迎院と号し給ふ、
御除地を給ふ、吹出物腫物
いっぽくろの類ひを祈誓する
時ハ利驗あり、
此仏体ハ元菅谷村竹ノ内坪ニ
有、いつの頃にや當時
の地ニ遷しける也、願望
果しの節豆袋を
上て謝す、又菅谷村
元地竹ノ内の土ヲ袋
にして捧るものも
有といふ



西光寺の仁王門

①～⑤ 2012年9月発行フォンズ62号
⑥～⑩ 2014年4月発行フォンズ70号
をご参照下さい。

「思い出の絵本」『ちょっとだけ』

安藤 緑（中城町）

ちょっとだけ



瀧村有子さく 鈴木永子え

ほっと
ひといき
『アメリカオニアザミ』

安嶋 隆



ヨーロッパ原産の植物で、北アメリカ、アフリカ南部、オーストラリアなどに広がっています。日本では北アメリカから輸入された穀物や牧草に混入して持ち込まれたと考えられています。茎は一メートル以上に

なり、七月に紅紫色の花を咲かせます。葉、茎、花など全体に鋭いトゲがあります。市内の道路わきや水田のあちこちで見かけるようになります。繁殖力が強く、放つておいた際、鬼面土器を駆除する必要です。この外来種として広がっています。綺麗なアザミがあると思つていると、いつの間にか株が大きくなつていき、この外来のアザミだと気づく頃には周囲にも広がつています。くれぐれもご注意ください。

ちょっと
ひといき

『じん食堂』

瀬谷 政行

昭和四十四年創業のじん食堂さんは、地元の方々に愛され続けて四十七年の歴史を紡いできました。お店の名前の由来



様にお出しのこと。そのことだわりのスープを使つたラーメンをメインに、メニューも豊富な食堂さんです。一品からでも必ずサードピスの小鉢を一つ付けるやしさも満点。ぜひ一度お立ち寄りの程。（写真は私が注文した、ラーメン・餃子・ライスです。）

昭和四十四年創業のじん食堂さんは、地元の方々に愛され続けて四十七年の歴史を紡いできました。お店の名前の由来なぎたい時も、ママのスカートを「ちょっとだけ」つかむなつちゃん…この本と出会った時、上の子の甘えたい気持ちを我慢する姿とかぶり、涙がぼろぼろとこぼれ落ち、胸が熱くなつたことを今でも覚えていいます。末っ子で育つた

がぼろぼろになると、お姉さんになることに憧れがありました。しかし、お姉さんになるということは、我慢や切なさを乗り越えてきているのだとこの本を通して教えられた気がしたのです。

私は、「お姉さん」になることに憧れがありました。しかし、お姉さんになるということは、我慢や切なさを乗り越えてきているのだとこの本を通して教えられた気がしたのです。

我が家の中の長女も中

学生。久しぶりにこの本を読み聞かせすると、また涙が溢れる私「お姉さんて大変なの分かるでしょう」と小学生の弟に照れ笑いしながら言い聞かせていました。長女、その姿に泣き笑いしてしまいました。

今回、この『思い出の絵本』を受けて、自分自身を振り返る良い機会となりました。共働きで心に余裕がない私を、夫や祖父母をはじめ支えてくれたいろいろな方のおかげで、子ども達は寂しさや切なさを乗り越え成長することができました。この気持ちを忘れることなく、子育てしていくたいと思います。

昭和四十四年創業のじん食堂さんは、地元の方々に愛され続けて四十七年の歴史を紡いできました。お店の名前の由来なぎたい時も、ママのスカートを「ちょっとだけ」つかむなつちゃん…この本と出会つた時、上の子の甘えたい気持ちを我慢する姿とかぶり、涙がぼろぼろとこぼれ落ち、胸が熱くなつたことを今でも覚えていいます。末っ子で育つた

がぼろぼろと、お姉さんになることに憧れました。この気持ちを忘れることなく、子育てしていくたいと思います。

常陸太田の地名話23 玉造『常陸太田市玉造町』

川松 博



昭和四十一年玉造遺跡を発掘調査した際、鬼高式土器を伴う住居跡一軒が検出された。他に瑪瑙材の玉類未成品、原石などを採集したという。

『新編常陸国誌』に「玉造アリ。蓋玉造部の居ル處ナリ」と記されている。また、『常陸國風土記』に「(静織里)の北に小水あり。丹石交錯れり。(中略)因りて玉川と号く」とある。丹石とはメノウのことで、玉造周辺で玉作りが行われていたのは確実と思われる。それに従事した部民を玉造部といふことによくする地名といわれている。なお、ここは「古代より上久米村といい、寛永の頃は玉造村とあり…」と『常陸國北郡里程間數之記』に加藤斎は記している。

（参考文献）『常陸国風土記』『新編常陸国誌』『金砂郷村史』『常陸國北郡里程間數之記』『常陸太田編』『茨城県地名大辞典』

に使うステップです。早朝五時に起きて、六時までにステップを仕込み、十一時の開店時刻まで必ず五時間寝かさなければお客様に来ます。末っ子で育つた

常陸太田市馬場町三六一
電話 七一五二五
営業 午前十一時～午後八時
定休日 火曜日
※平日は午後三時～五時は準備中

新太田点描⑯

丹 就道と太田地方

正木浦（東海村）

磯部といふところ金澤氏のもとに

いとしく水の心そすみまさる

浦の名におふ正木ちる頃

やとりて

はたちあまり年波こえて今宵また

磯部の里に枕定めつ

真弓山

ますらおの身にならすてふ真弓山

名をなつかしミ訪ねてそいる

今、私の手もとに『丹 就道詠草』と題する

一冊の歌集がある。ページを紐解くと短歌六

七八首、長歌十首並びに反歌十一首の都合六

九九首が書き綴られている。本書の成立は、

詠まれている歌や詞書などから推測して就道

の最晩年であることが判る。

ところで、この本の著者就道は、水戸藩士丹

一言(号、慎斎)の長男として安永七年(一七七八)

に生まれた。字は子正、通称を市郎兵衛と云

つた。享和三年(一八〇三)に史館雇となり史館

書物や文庫役を務め、文政八年(一八二五)三月

に四十八歳で死去している。また、就道の妹

は藤田幽谷の妻であるから、その子東湖は甥

になり、父の弟雅言は原家を継いでいるので、

その子伍軒とは従兄弟ということになる。

さて、この詠草であるが、内容的には、春・

夏・秋・冬の四季と恋歌、雑歌と部立てされ

ているが必ずしも明確ではない。バラバラと

捲り読んでいくうち雑歌の部に太田地方及び

周辺地域を詠んだ力所があつたので左に掲載

しよう。

村松（東海村）

風の音もしくれてわたる村松の
浦さひしかる冬ハきにけり

けふよりハいはての里に咲花の
色に習て世を過ごしてん

磯部といふところ金澤氏のもとに

はたちあまり年波こえて今宵また

磯部の里に枕定めつ

真弓山

ますらおの身にならすてふ真弓山

名をなつかしミ訪ねてそいる

この二首は、太田の里から桃源橋を渡つた
辺りと、かつて西山荘に隠棲して大日本史の
編纂に専念していた義公の日常を彷彿とさせ
るものがある。

（吉成英文）

露の宿りハこのわたりかも

日の本の史すりい出す櫻木の

硯の海に生ふるくさひら

□しこしな世を救てふ法の火の

絶ぬ岩屋ハ苔深くして

冬されハ天下野の洞に風さえて

金砂かたけにミ雪ふりしく

白羽山

見るからに神も心やひらくらん
わきてしらはの山のさくらを

静（那珂市）

いくたひか山めくりしてはれくもる
時雨にさはく静の市人

玉簾瀧（日立市）

天津かる見ぬ世をかけてとく法に

声打そふる玉たれの瀧

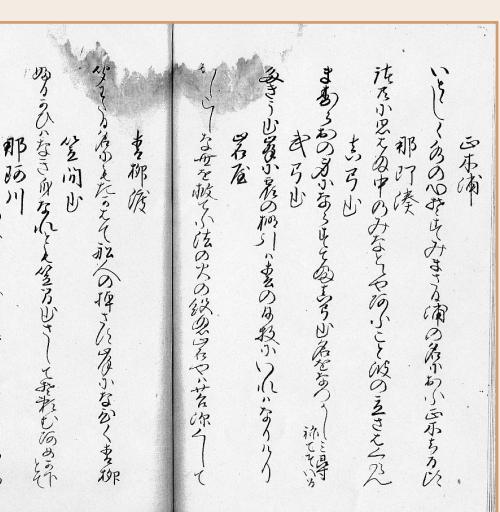
袋田瀧（大子町）

幾しほの紅葉ちりそふ此頃ハ

むらこに見ゆる水の国原

題不知

けふよりハいはての里に咲花の
色に習て世を過ごしてん



『丹 就道詠草』の内容の一部